

報道関係者各位

平成 20 年 1 月 16 日

森ビル株式会社

森美術館

森美術館 オーディエンス賞・MAM賞を授与

森ビル株式会社（東京都港区 代表取締役社長 森 稔）が運営する森美術館は、この度、「六本木クロッシング 2007：未来への脈動」展（2007 年 10 月 13 日～2008 年 1 月 14 日まで開催）にて、来館者の投票によって選ばれたアーティストに贈られる「オーディエンス賞」など各賞を授与致しました。

各賞の受賞者は以下の通り。（敬称省略）

<オーディエンス賞> 受賞者：田中 偉一郎
美術館来館者による最多投票を獲得
（12 月 17 日投票受付終了）

<MAM賞> 受賞者：榎 忠
山下 裕二（明治学院大学教授／森美術館理事）、
市原 研太郎（美術評論家／森美術館理事）、
南條 史生（森美術館館長）が選考

<特別賞> 受賞者：富谷 悦子
篠山 紀信（写真家）により選出

<特別賞> 受賞者：春木 麻衣子
伊東 豊雄（建築家）により選出

<特別賞> 受賞者：名和 晃平
フランソワーズ・モレシャン（ファッション・エッセイスト）により選出



授賞式（2008 年 1 月 14 日）にて

■六本木クロッシング

多様なジャンルで活躍する日本のアーティストを紹介する「六本木クロッシング」は、現在進行形の美術の動向に注目する森美術館ならではのシリーズとして、2004 年にスタートしました。本展は 2 回目となり、特に「交差（クロッシング）の意味に注目し、枠に収まりきらないエネルギーと影響力をもつ、今みせるべき 36 作家を厳選し、その作品を展示しました。なお、本展覧会は開催 94 日間で、合計 382,450 名の方に来館いただきました。

「オーディエンス賞」は、アートに関するディスカッションに鑑賞者（オーディエンス）のみなさんも参加していただきたく設けたものです。このほか、森美術館館長をはじめ理事会のメンバーが選考する「MAM賞」を設け、さらに今回の「六本木クロッシング 2007」では、新年を飾るサプライズとして、クロスジャンルで活躍する審査員 3 名が選んだ「特別賞」を設けました。

<本件に関するお問い合わせ先>

森美術館 広報部 高橋・田村

TEL:03-6406-6111 FAX:03-6406-9351 E-mail: pr@mori.art.museum

森ビル株式会社 広報室 野村・深野

TEL:03-6406-6606 FAX:03-6406-9306 E-mail: koho@mori.co.jp

オーディエンス賞

受賞者：田中偉一郎



田中偉一郎《目おちダルマ》2002年
サイズ可変 ミクスト・メディア
Courtesy:Yuka Sasahara Gallery

表札、魚拓、ダルマ、カラオケ、茶柱…。ささやかではあるが伝統と習慣によって疑いもなく守られてきたさまざまなシステムを、田中は瞬時に骨抜きにする。その機知とあっけらかんとした態度は、見る人に笑いと爽快感を起こさせる。視覚と脳を刺激し、笑いへと導く田中の独特の手法は鮮やかだ。彼の狭い展示スペースにはいつも人がたまっていて、老若男女問わず笑顔がこぼれていた。今を生きる私たちに必要な何かが、田中の作品の中にあることは確かだ。

(荒木夏実・森美術館キュレーター)



受賞者コメント

「オーディエンスのみなさま、こんにちは。投票ありがとうございました。オーディエンス賞受賞、実に嬉しく思います。みなさんかなりチンマリしたものが好きみたいですね。これからも、世の中に受け皿の無いチンマリしたものをテンポよくつくっていきます。よろしくおねがいします。」

田中偉一郎（たなか いちろう） | 1974年愛知県生まれ。2000年以降個展・グループ展で作品を発表。現在「美術手帖」誌上にて「やっつけメーキング」連載中。

MAM賞

受賞者：榎 忠



榎忠 (RPM - 1200) 2005年 - 高 3.3m、直径 4.5m 金属
撮影：木奥恵三

作者が使い慣れた旋盤を用いて作り出した無数の鉄材部品は、円形の基盤の上に積重ねられ、あたかも空中に浮かぶ未来都市の模型のように見える。作品の量塊性と重量感、そのイメージが喚起する幻想的なロマンチズムは、その設置の妙とあいまって、ほかに比肩するものがない独自の世界を切り開いた。乾坤一擲、この作品に賭けた作者の思いが凝縮している。この稀有の中堅作家の、活動の集大成となる作品をここで評価することに、審査員の意見が一致した。

(南條史生・森美術館館長)



Photo: Ikeda Masanori

受賞者コメント

東京で作品を発表するのは初めてだったのでこのような賞を頂き、田舎者の自分に目を向けて頂いて嬉しく思っています。賞をもらうのは小学校の図画の授業以来で、当時はとても励みになった。今回こういった賞を頂き、大変ありがたく思う反面怖い気持ちもあります。

榎 忠（えのき ちゅう） | 1944年香川県生まれ。60年代後半から関西を中心に活動。おもな展覧会は2006年「その男、榎忠」(KPO キリンプラザ大阪、大阪) など多数。

<特別賞>

受賞者：富谷悦子



《無題》2007年 courtesy: YAMAMOTO GENDAI

プロフィール

1981年愛知県に生まれる。2007年に東京藝術大学大学院美術学部美術研究科版画終了。2006年「[素菊]」(山本現代、東京)や2006年「[ALLLOOKSAME? TUTTUGUALE? ARTE DA CINA, COREA, GIAPPONE]」(サンドレット・レ・レバウデンゴ財団現代美術館、トリノ、イタリア)に参加。

審査員：篠山紀信

本展はまるで異種格闘技の様相を呈していて、この中から一人を選び出すことは正直困憊した。その中で富谷悦子さんに魅入られたのは、驚くべき高密度な創作力と技術力そして作品制作にかけの問尺に合わない時間の消費量だ。写真家であるぼくの現在は、デジタルの登場で一瞬の内に欲しい映像を手に入れ、すぐさま確認出来る。本展最年少作家で美しき女性が、まだありあまる時間を惜しげもなく使って、憑かれたように彫り起こした作品は、写真初期の銀塩写真家がモノクロームで撮った細密世界のように懐かしく美しく、そしてエロティックに見えた。

篠山紀信 (写真家)

受賞コメント

突然の知らせにとっても驚きました。全く思いもよらなかったもので、非常にうれしいです。たくさんの方に見ていただける機会を得られたことと合わせて、とても感謝しております。



受賞者：春木麻衣子



《either portrait or landscape 1A》2007年 courtesy: TARO NASU, Tokyo

プロフィール

1974年茨城県に生まれる。95年-96年にはGOLDSMITHS COLLEGE, UNIVERSITY OF LONDONへ交換留学、97年に玉川大学文学部芸術学科卒業。99年以降、「ON RECENT LANDSCAPE」(MUSEO DE COLECCIONES ICO, マドリッド)や「伍」(大宰府天満宮、福岡)など、多数の個展やグループ展に参加。

審査員：伊東豊雄

春木麻衣子さんの写真はほとんど闇に包まれている。そしてわずかに残された白い余白から不思議なメッセージが伝わってくる。「either portrait or landscape」では、ハイウェイ下の歩道橋を歩いている人々の姿だけが浮かび上がる。男、女、子供、自転車…、さまざまな人がさまざまなポーズで歩いているだけなのに、人々は東海道を旅していた人達のように遠い国へ向かって歩き続けているように見える。

抽象でもなく、具象でもなく、モノクロでもなく色彩がある訳でもなく…でも深く柔かい。

伊東豊雄 (建築家)

受賞コメント

カンムリ?! がすり落ちてこないよう背筋を正し、振りつけます。勇気をありがとうございます。お世話になったみなさんに感謝をこめて。



受賞者：名和晃平



《Scum-Compulsion》
2007年
サイズ可変
発砲ポリウレタンに塗装
Courtesy: SCAI/
Shiraishi Contemporary
Art Inc./Nomart Project
Space

プロフィール

1975年大阪府生まれ。2003年京都市立芸術大学大学院美術研究科博士(後期)課程彫刻専攻修了。「第三回バレンシア・ビエンナーレ」(バレンシア/2005年)など多くのグループ展に参加、主な個展に「GUSH」(SCAI THE BATHHOUSE, 東京/2006年)など。また2007年には京都府文化賞奨励賞を受賞した。

審査員：フランソワーズ・モレシャン

時代や流行を超えた美の永遠性ということで名和さんの作品を選びました。流行を超えたというのは正確ではないかもしれませんが。というのもシュルレアリズムがまだ勢いを持っていた50年代風の作品はある意味で、今、極めて流行だから。現代の cocktails 風威厳を保つ作品は私にはいつか来る氷河期の真っ白な樹木を思わせる。アーチ型に伸びる幹は、人間を守ろうとしながら、天に向かう威厳を見せながら、未知の世界へと私たちを誘う。まるで神道の神が宿るよう…。

フランソワーズ・モレシャン (ファッション・エッセイスト)

受賞コメント

この度は本当にありがとうございます。ご協力頂いた多くの方々に感謝の気持ちで一杯です。「うつろなスペクタクル」というテーマを「六本木クロッシング」という混沌で表現し、それが評価を得たということに大変意義を感じています。今後も「感性と表皮」について、彫刻を続けていきます。

